

2026年2月18日

兵庫県立伊丹西高等学校
第3学年地域探究ゼミ
エッセイ集

〒664-0025 兵庫県伊丹市奥畑3丁目5番地

兵庫県立伊丹西高等学校

豊かな地域創生

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

高司の子供たちやその親御さんを支えるコミュニティを見ていくとそこには探究テーマであった「よい地域」を創造する様々な工夫が施された取り組みがありました。私たちは実際に高司児童館を訪れて、生の声を聞きました。するとたくさんの改善点が明らかになっていきました。例えば、人件費1500万円、遊具代500万円等の費用がかかり、金銭面でかなり苦しい状況であり、遊具をさらに増やしたいが予算がないということや、設備面では、万が一、物が飛んで来たら危ないので、集会室と遊戯室の間にパーティションが欲しいということのを伺いました。この問題に対し、保育料の助成制度をもっと手厚くしなくてはならないと思います。さらに、一日の利用人数は50人、多い時には100人であり、隣が小学校であるということもあり、小学生が多いということも知りました。しかし、自習スペースでは高校生や中学生も利用するそうです。そしてコロナ前は年間20000人だったのが、コロナ後では16000人に減少しているという事実も知りました。しかしすでにその影響も緩和されているため、今後コロナ前のように戻ることを願います。そして、最も大切にしていることは安心して行ける場所だそうです。やはり、子供たちが安心安全に触れ合うことにより心身の発達や社会性を身に着けることにより、自己肯定感や問題解決能力の向上を育成することで今後、社会の一員として主体的に生きていくための学習につながると感じました。そして地域社会上の問題として、少子高齢化によって学級が減っており、さらに高司地区のみで300~400人の子供たちが不登校であるという点を伺いました。これらの問題点に対し、社会の発展のための労働力が今後不足すると予想されると思い、改善が必要であると考えます。そしてこの問題はよい地域を創造するための大きな妨げとなると思います。そして、防災遊びという取り組みでは非常時のテントやカッパの作り方、紐のくくり方、AEDの使い方などを学び、防災意識の向上に繋げている点に関心を抱きました。この実態や取り組みを知り、よい地域をつくるためには、子供が自由に利用でき、心身の成長に繋げていく場である児童館は必要不可欠であると思います。子供たちだけでなく、地域の人々が互いに助け合い、皆心地よく活動できるコミュニティを作っていかななくてはならないと改めて感じました。地域を支える人々には様々な努力があると思います。僕も今後、地域の状況や環境の変化に対応しながら、豊かな社会創造に貢献できるよう努力を続け、地域とともに成長していきたいと思っています。

よい地域とは何か

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

「よい地域」とは何か、私は今回この問いに関して、これはよい地域の条件一つに入るだろうと思うことがあります。それは「居たい、住みたいと思える場所」だと思います。でも、それはどのような場所なのだろうと考え、私は高司児童館の館長に話を聞きに行きました。児童館はその地域に住んでる子供たち、親御さんなどのサポートを主に行っている場所であり、住みたい場所という条件にはやはり子育て世帯にそうしてもらうことが重要であると考えました。児童館では館長をはじめ、あと7名の職員が勤務しています。そして他にボランティアや元教師の方が来て勉強・宿題を見てくれたりと、児童の助けになるような活動を行っています。児童館は毎日50人程度の方が利用しており、月約1500人、年間になるとおよそ1万6千人の方が利用します。そしてほぼ毎週、児童が楽しめるイベントや子育てに関する活動、高齢者向けの活動など様々なことを行っています。このようなことをインタビューを通して聞き、若い世帯から高齢者まで多くの方が楽しめ、学べる場所があることで住みたいと思えるようになるのではないかと思います。しかし、これから地域に移住してくる人にとって、そのような施設があるとはぱっと見ではわかりません。そこで、客観的な視点で見れば、ここが住みたいと思える点が見つけれられるのではないかと思います。私は実際に自転車を走らせ、見、まず良いと思ったところは町がきれいだということ。やはりごみが散らばっていたり、道が舗装されていなかったりすると、住みたくないと思います。しかしごみが散乱しておらず、道がしっかり舗装されているところを見て、このような清潔感が大事だと再認識しました。このような事のうらでは、ボランティアの方などがゴミ拾いの活動を行っているといった地道な活動を行っている点があると思います。他に良いと思ったことは、公園や公民館など集える場所が多くあるところでした。とある公民館に隣接している公園を見た時、そこでは親子や子供、老夫婦など様々な世帯の方がおり、見ていてとても暖かいところだなと思いました。このような場があると治安がいいと感じます。

私はよい地域とは何かという条件に「居たい、住みたいと思える場所」と挙げました。まず主観的に見ると子育てや楽しめる施設があるということ。客観的に見ると、町中に清潔感があり、見ていて暖かいと思えるところがあるということ。と、いう点が「居たい、住みたいと思える場所」であると思い、よい地域だと思いました。

「よい地域」のその先

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

まず「よい地域」の「よい」とはどの視点から見た「よい」なのか考えました。

それは物事をどの視点から見るかで「よい」というのは異なり、また「よい」とは人の数だけあるものだと考えた上で一概に「これだ」というものを見つけるのは難しかったです。

そのことを踏まえた上で

私が思う「よい地域」について考えたときに交流の場があることだと考えました。

そして「よい」とは安心できることだと考えました。なぜなら授業の一つに「よいクラス」とは何かについて探求をしたとき生徒からみて「よいクラス」の意見を出したなかに自分の居場所があるというのは居心地と関係しているのではないかというものがあったからです。その居心地には安心できるという気持ちが含まれていると考えたからです。

また「地域」とは場所や環境のことを指すのではないかと考えました。

「よいクラス」の居場所について考えたときにそこには人が関係しているのではないかと思いました。それはクラスで過ごしていくなかでクラスメイトや友達や先生などの人と関わって過ごしていくからです。なにかしら私たちは生きていくなかで人と関わって生きています。ですがそういう居場所というものがあれば安心できるにつながるのではないかと考えたからです。

そこで大事なのが交流の場があることだと考えます。しかし、交流の場があることだけが重要ではありません。その交流の場があることで様々な人と関われる機会ができたり、誰かと会話をすることで一人では気付かなかったことを知ることができたり、一人では解決できないことを相談したりなど人との関わりのなかに生まれるつながりやコミュニティや助け合いといった人と人との交流がすごく大事なことではないかなと思いました。

その交流は今ではネットが発達し SNSなどで場所に限らず交流できる時代になりました。ですが SNSが発達した今だからこそ実際に人と会うことに意味があるのではないかと考えさせられました。

フィールドワークで高司児童館に行って分かったことは交流ができるプログラムを色々提供されていることです。和太鼓やソーラン、防災まつりといったものからクラブ活動、また高司児童館では出前児童館が行われ距離の問題で来られない方にも対応できるようにくらんど人権文化センターや仁川デイサービスセンターなどといった場所にておき出前児童館をされています。そのうらには人手不足や資金不足といった問題があります。こういった交流のできる場があること、またそのうらには支えている人がいることを知り人と人との交流について深く考えさせられたものでした。

地域が未来を支える

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私が「よい地域」とは何かを考えたときに、子どもを支える大人が身近にいることが良いと思う。具体的な取り組みとしては子どものうちに様々な体験をしておくことで成長を間接的に支えることができると思います。探求をしていくと国立青少年教育振興機構”子どもの成長を支える20の体験”という資料に出会いました。体験を大きく3つのグループにすると「体験活動」「生活習慣」「人とのかかわり」に分けられます。具体的に「体験活動」は文化芸術体験や地域行事。「生活習慣」は勉強、読書や遊び。「人とのかかわり」は地域との関わりを持てる。この具体例をもってよい地域について考えたときに「児童館」という施設にたどり着きました。

その中でも伊丹西高等学校から近い高司地域にある高司児童館について調べた。児童館が取り組んでいる「体験活動」として児童館でのイベントがあり、イベントのなかで高司地区で行われている和太鼓やソーラン節のクラブ活動、高司小学校で行われている吹奏楽団と盛り上げています。「生活習慣」としては図書室で本の貸し出しが可能です。また学習スペースがあり宿題をすることができ、元教師の方やボランティアの方に教えていただくことも可能です。「人とのかかわり」は先程伝えたイベントを通しての交流や児童館が取り組んでいる子育てプログラムや出張児童館があり子育て相談専門の先生に相談でき、生後の期間別にプログラムがありハイハイや遊具遊びに取り組むことが可能です。出張児童館では児童館から遠く移動が大変な方のために活動しています。イベントを通して友達が作れたり新たに悩みを相談できる仲間に出会えたり出来ることで地域との関りを増やすことが可能になります。

さらに高司児童館の館長の方にインタビューをさせていただいて改善点について聞きました。話を聞くと具体的に2個ありました。1個は館内の設備の改善です。高司児童館は元幼稚園であるため宝塚市内で唯一運動場がありバスケットボールや一輪車などで遊ぶことが可能です。しかし幼稚園の校舎の為に自由に使える部屋数が1つで本当は学年ごとに部屋を分けたいところですが難しく、足りない部分には増築を行っています。そのため建物の建て替えを行うことが出来れば良いのですが資金が足りないことが現状です。2個目は資金の不足です。約2100万円の資金がある中で約1500万円は人件費に使われ、7~8万円は光熱費に掛かります。残りとなると少なく新しいおもちゃを買うことや施設の改装に使うことが出来ません。

このことから児童館は子どもを支える人々がいるよい地域を考える上で必要だと思う。児童館を運営していく中で地域の人々との交流を可能にしよい地域づくりの貢献をしているがより良いものにする為にはお金が不足している現実にあります。資金の増額や募金、寄付が出来るようなシステム作りが出来ればより良い環境で子どもたちの成長を支えることがよい地域をつくる一歩になると考える。

歴史からのつながり

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は「伊丹の歴史と宝塚の歴史」について調べました。

私は今まで歴史について深く調べることは少なく、歴史の背景、地域とのつながりなども考えたことがなかったです。なので「伊丹の歴史的なものは何ですか」「宝塚の歴史は地域にどう影響していますか」など聞かれてもお酒や宝塚歌劇団については答えられてもそこからの文化のつながりについては答えることができなかつたです。そこから私は、歴史から文化へのつながりについて調べたいと思いました。

最初、私は伊丹の歴史について調べました。

伊丹ミュージアムや長寿蔵に訪れ地域を深めることができました。長寿蔵では酒造に使われた道具の展示がされており、酒造方法などがわかりました。

伊丹ミュージアムでは、スタッフの方が伊丹の歴史について説明をしてくださいました。兵庫県伊丹市は古くから酒造りが盛んな町で、「清酒発祥の地」として知られていることがわかりました。江戸時代には伊丹酒が全国に広まり、商業の町として発展しました。鉄道開通後は大阪の近郊都市としても成長し、現在は空港のある便利な都市として発展を続けています。

次に宝塚の歴史について調べました。

宝塚では首地蔵などの歴史的建造物の見学や董ミュージアムに行き知識を深めました。散策する中で歴史的建造物が多いと感じ調べると宝塚市は、もともと農村地帯でしたが明治時代に宝塚温泉が開かれ、観光地として発展したことがわかりました。鉄道の開通により大阪や神戸への交通が便利になり、戦後は住宅都市として発展しました。そして、1914年に宝塚歌劇団が創設されたことで全国的に知られるようになりました。歌劇団は多くの名作を生み出し、独自の文化を築いてきました。その影響で周辺には劇場や観光施設が整備され、宝塚市は芸術と文化のまちとして発展しました。観光地として有名になったことで歴史的建造物も多く残してあることがわかりました。現在では自然が豊かで観光地として盛んな地域として発展を続けています。

この二つの地域を調べて、伊丹では昔からの酒造業により交通の便が整ったことで地域が発展し今も伊丹の名産としてお酒が残っています。宝塚では歌劇団が人気を集めたことで観光地として有名になり地域が発展しました。現在でも街づくりの活性化として美観維持などに取り組んでいます。このように歴史的につながっていった文化が後の地域に影響していき今の地域が作られていったと考えることが出来ました。

伊丹と宝塚の歴史の違い

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は「伊丹と宝塚の歴史」について調べました。

私は今まで伊丹の歴史はお酒から始まって、宝塚の歴史は宝塚歌劇団が中心になってできていると考えていました。伊丹と宝塚の文化がどのように作られてきたかを考えることが少なく実際に見に行くこともあまりなかったです。なので私は、伊丹と宝塚の歴史を実際に見たり聞いたりしてそしてそれがどのように今の街につながったのかを知りたいと思いました。

最初は伊丹市の歴史についてです。

伊丹市は、「伊丹郷町」として酒造業が盛り上がり、「伊丹酒」の品質が上がりました。「伊丹酒」は、「下り酒」として江戸へ運ばれ、たくさんの人気を獲得しました。これが「清酒発祥の地」といわれる理由です。この酒造りをするのに使用した道具を「長寿蔵」で見してきました。長寿蔵では、酒造りの様子を映像で見たり、模型を見て知ることができました。アニメーションで酒造りをするのに必要な道具を一つ一つ詳しく説明してくれたのでとても分かりやすかったです。伊丹は、自分たちの町でつくったお酒を江戸で売り、それで得たお金で町を発展させたということを知りました。

次は宝塚市の歴史についてです。宝塚市では、すみれミュージアムに行きどのようにして宝塚という町が発展してきたのかを学ぶことができました。宝塚市は、もともと温泉地として発展してきました。小林一三さんが大きい温泉をつくりましたが、水がなかなか温まらず人が集まりませんでした。そこで、少女たちを集め歌や劇、踊りを披露しそれが人気となりました。これが宝塚歌劇団ができた由来です。宝塚歌劇団は歌や踊りなどで人気を集め、たくさんの名作を生みだしました。それが全国的に広まりたくさんの人に知られていくようになり、観光客が増えました。100年以上の歴史をもち、宝塚の街を盛り上げています。宝塚は「歌劇と温泉のまち」として広く知られていくようになりました。すみれミュージアムでは実際に公演で着ていた衣装が展示されていました。とてもキラキラしていて綺麗でした。

今回、伊丹市と宝塚市の歴史を実際に見たり聞いたりして、伊丹市は酒造りなど独自の文化で街を築いていき、宝塚市は温泉などの自然や外部の影響を受けながら街を築いていったのだと考えました。隣同士にある市でも文化の発展にたくさんの違いがあり、とても面白いなと感じました。また、伊丹市と宝塚市の2つの市の歴史を実際に見に行くことができ、たくさん学べてよかったです。

伊丹市と宝塚市

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

『よい地域』とは何かと問われたとき、私は昔からある地域ならではの伝統文化・行事・文化財を大切にしている、地域内でコミュニケーションが取れていると答えました。私の住む伊丹市は毎年11月3日に秋祭りの一環としてお神輿がやって来ます。この日は、多くの人が祭りを盛り上げようと家から出て自ら地域と関わりを持つようになるため地域の一体感が生まれているように感じます。私は伝統を受け継ぐということは地域の個性を守り地域繁盛を目指すという意味が込められていると考えています。私の班ではよい地域とは何かと考えているうちに何故、市によって文化に違いが生まれたのか疑問を抱くようになり『隣接する伊丹市と宝塚市の違い』について調べることにしました。

初めに伊丹市についてです。私は今回、御願塚古墳、行基象、市立伊丹ミュージアムに伺いました。御願塚古墳や行基像に実際に行った時はただ凄い、など普通の感想しか出てこなかったが伊丹ミュージアムでお話を聞いたところ、御願塚古墳にはまだ発見されていない多くの遺体や副葬品が残っている、行基は川や堀だけではなく道なども造っている、伊丹市はお酒が有名と伝えられているものの、伊丹市より西宮市の方が先に造られたなど、細かく調べてみないと知らないままだったであろう伊丹市の歴史に触れることができ、もっと自分の住んでいる地域について知りたいと思うようになりました。

一方で宝塚市では神社やお寺も残されているものの宝塚歌劇団や手塚治記念館などが有名です。宝塚歌劇団は千九百十四年から始まり、温泉施設に使われるはずだった土地を活用する為に作られており現在も当時掲げられた目標のように『老若男女誰もが楽しめる国民劇』になっていると感じます。

手塚治記念館は手塚治さんが多感な時期を過ごした様々な経験を基に作られておりベストセラーとなった手塚治のデビュー作『新宝島』でマンガブームを引き起こしたことや、手塚作品の世界観をリアルに体験、感じられることが有名とされています。そのため、手塚治記念館は今も多くの観光客が訪れています。

二つの市を比べて私は宝塚市は伊丹市と隣接していると思えないほど洋風の文化を感じました。二つのことからよい地域とは、最初に書いたように地域ならではの伝統文化・行事・文化財を大切にしていることだと考えます。しかし、ただ伝統を守るのではなく地域の人一人一人が何故この伝統が受け継がれているのかの伝統の背景を理解して地域全体が心掛けることより良い地域に作りに繋がると考えます。

伊丹と宝塚から考えるよい地域

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は地域探究の授業を通して伊丹市と宝塚市を訪れ、それぞれの歴史に触れる中で「よい地域」とはどのような場所なのかを考えるようになりました。今回訪れた伊丹の須佐男神社、市立伊丹ミュージアム、御願塚古墳、そして宝塚の首地蔵や稲荷神社は、地域の人々の思いや祈りが積み重なってできた場所だと感じました。これらを通して、“歴史が今も暮らしの中に生き続けている地域”こそがよい地域なのではないかと考えました。まず伊丹では、古くからの信仰や暮らしの痕跡が今もしっかりと残っていました。須佐男神社では地域の人々に大切にされ続けてきたことが伝わり、日常の中に神社が自然に存在していました。また、市立伊丹ミュージアムでは伊丹の文化や酒造りの歴史が丁寧に展示されており、過去から続く伝統をわかりやすく学ぶことができました。さらに御願塚古墳を訪れた時には、千年以上前に生きた人々の営みがそのまま地形として残っていることに驚きました。地域の歴史が長い時間をかけて守られてきたことを実感しました。一方、宝塚では昔から伝わる信仰が今も大切に受け継がれていることに気づきました。首地蔵は首から上の病気が治ると言われており地域の人々が困った時に手を合わせる場所として長く守られてきたもので、単なる歴史的な遺物ではなく、現在も「地域のよりどころ」として息づいていることが印象に残りました。また八つ橋稲荷神社では、商売繁盛や安全を願う人々の思いが伝わり、地域の人々と神社の距離の近さを強く感じました。

これらの場所を巡る中で、伊丹と宝塚には「過去と現在がゆるやかにつながっている」という共通点があると感じました。歴史がただ保存されているのではなく、地域の人々の生活の中で意味を持ち続けています。私は、この「歴史を大切にしながら今の暮らしに生かしていること」がよい地域の条件なのではないかと思いました。今回の探究を通して、人々が自分の住む場所に誇りを持ち、昔から続く文化や祈りを守りながら生活していることが、安心して暮らせる地域をつくっているのだと感じました。私は、伊丹と宝塚のように歴史が生活とつながり、地域の人々によって受け継がれている地域こそ、未来に残していくべき「よい地域」だと思いました。

居場所であり帰りたい場所

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

「よい地域とはどんな場所だろう」と考えたとき、便利さや建物の新しさ、自然の豊かさなど、様々な条件が思い浮かぶ。しかしどれも大切ではあるものの私が最も重視したいのは「人とのつながり」である。地域に暮らす人々が互いに気に掛け合い、支えあえる関係が築かれているかどうかは地域をただの「居留地」ではなく、「居場所」へと変える鍵だと思う。これらを2回のフィールドワークを通して感じたこととともに人とのつながりが大切な理由を述べたい。

まず、人とのつながりは日常の安心と心の余裕を生む。例えば近所の人と「おはようございます」と挨拶を交わせる関係があるだけで朝の空気はどこか暖かく感じられる。もし夜道で困っているときに「大丈夫？」と声をかけてくれる人がいる地域なら安心して暮らせる。こうした小さな繋がりは私たちの生活の質に影響を与えている。人と人の距離が遠く互いに無関心だと地域はどれだけ整備されていても冷たく感じる。

さらに人とのつながりは地域の「問題を解決する力」にもつながる。災害や事故、急なトラブルはいつ起きてもおかしくない。そんな時、住民同士が顔見知りや普段から交流がある地域ほどお互いの様子に気づきやすく自然な助け合いが生まれる。「隣の人の姿を最近見ていない」など小さな変化に気づく力はつながりがある地域だからこそ生まれるものだ。行政や制度だけでは行き届かない部分を補うのが、人と人のつながりであり、それが地域の安全性を高める。

また、つながりは地域に「活気」をもたらす。祭り、イベント、清掃活動などに参加すると普段は関わらない人たちと自然と交流が生まれる。こうした場は、地域の歴史や文化を知るきっかけにもなり、住む人の地域への愛着を深める。愛着が強まれば「この地域をよくしたい」という思いも生まれ、さらに新しい活動が生まれていく。つまり人とのつながりは地域を自分たちの手で育てていこうとする「循環」を作り出すのだ。

もちろん、つながりといっても昔のように家族ぐるみで密にかかわる必要はない。むしろ現代においては適度な距離感を保ちながら必要な時には助け合える「ゆるいつながり」が求められている。深く関わりすぎて負担になるのではなく、無理せず自然体でいられる関係が理想だと思う。それでも心のどこかで「困ったら頼れる人がいる」と思えるだけで人は安心して毎日を過ごすことができる。

結局、どれだけ便利で環境が整っていても人とのつながりが薄ければ地域はどこか孤独で味気ない。逆に多少不便であってもあたたかいつながりがあればその地域は「帰りたい場所」になる。よい地域とは誰かが誰かの存在を認め、時に支えあい、生きていくための温度が感じられる場所だ。そこに住む人々の心に灯る小さな温かさが地域を本当の意味で豊かにするのだと思う。

よい地域とは

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は「よい地域とは」ということについて、人と人との関わりが深く関係している＝地域コミュニティが充実していることと考えました。

「よい地域」と聞かれると、「地域コミュニティが充実していること」「治安の良さ」「生活便利性」「交通の便がよいこと」と考える人が多いと思います。実際、私自身も「よい地域」と聞かれるとこの四つを挙げていました。しかし、近年、高齢化によって地域コミュニティを充実させることが困難な地域があること、地域の関わりが薄くなっていることから、よい地域を私たちが作っていくにはどうしたらよいかを考えました。

地域コミュニティを充実させるのが困難な地域がある原因として、高齢化を挙げましたが、高齢化によるものだけではなく、現代の若者の考え方として、自分の家庭内で物事を完結させるという考えが主流となっており、若者が地域の活動に対しての興味・関心が薄くなっていることも関係しています。そこで私は、宝塚市高司地区、伊丹市スワンホールが取り組んでいる地域行事、またそこでの課題について調べました。

まず、宝塚市高司地区では、夏祭りの開催、子ども食堂による子育て支援などが行われており、スワンホールでは料理教室などを行っていることがわかりました。高司地区では職員の高齢化、減少が深刻化しており、それによる地域行事が減少、また、参加人数も減少していることがわかりました。スワンホールでは地域で運営しているのではなく、会社が運営しているため、職員の高齢化、減少や行事の減少はないが、高司地区と同様に参加人数が少ないという課題があることがわかりました。二つの施設で共通していることは参加人数の減少で、特に私たち中高生などの若年層の参加が少ないことです。よい地域を存続していくためには私たち若年層の地域行事への参加は非常に重要であり、不可欠です。地域行事へ参加することで自分が住んでいる地域の行事だけではなく、地域の伝統や文化を学ぶことができます。また、普段話さない人とも交流でき、そこから新たな地域コミュニティが形成されます。こうして「よい地域」がつくられます。しかし、地域行事への参加を強制してはいけません。強制になってしまうと若者の地域への興味・関心がもっと低下してしまう可能性があるからです。地域行事への参加を促すためには SNS の活用が重要です。

このように「よい地域」とは主に地域コミュニティが充実していることであると考えます。地域コミュニティを充実、存続させるためには若者の興味・関心が重要であり、若者の地域行事の参加率を上げることが今後の地域コミュニティを左右すると考えます。

よい地域とは

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私がよい地域について考える時、真っ先に思い浮かぶのは、そこで暮らす人達の表情です。どれだけ都会で便利な場所であっても、そこに住む人が疲れきった顔をしていれば、そこに暖かさは感じられません。一方で、決して特別な施設があるわけではなくても住んでいる人同士が、自然に挨拶を交わし、困った時に、手を差し伸べれる場所は安心感がある。私にとって、居心地のよい地域とは、そんな人の温度が感じられる場所だと考えている。このことを実感したのは、中学生の時の体験です。私は毎朝同じ時間に家を出ていましたが、学校へ向かう通学路には、毎日のように、顔を合わせる人達がありました。駅へ向かうおじさんや散歩をしているおばあさんなど、特に酒屋の店主はいつも大きな声で、おはようと声をかけてくれました。最初は恥ずかしくて無視したりして返していなかったけど次第にその挨拶が楽しみになり、毎日自分から挨拶をするようになりました、毎日の数秒のやり取りではありますが、その小さな交流が私の毎日を頑張ろうと思うようになった瞬間でした。また地域の良さは安心して過ごせるかどうかにも現れます、ある日登校中に自転車のチェーンが外れて困っていた時に、近くにいた知らないおじさんに助けをもらい、近くの自転車屋さんまで連れて行ってもらいました。そのような、ほんの些細な助けではありますが、その時の安心感は、私の心に強く残っています。地域の誰かが自分を気にかけてくれている、そんな感覚が得られる場所だからこそ、よい地域と呼べるのではないかと感じます。さらによりよい地域には、自分の居場所があるという感覚があります。私にとって、近所の小さな公園がそれに当たります。放課後、家の近くの友達と話したり飼っている犬の散歩に行ったりした場所です、決して広いわけではないし、遊具も少なく人も少ないですが、そこへ行くと、落ち着きしんどかった、心も落ち着きます。地域の中で、自分が戻れる場所があると、それだけで、日々が生きやすくなると、私はこのことから、感じました。結局のところよい地域とは、豪華さや便利さだけでは決まらないと思っています。なぜなら、人と人との距離感が近すぎても、息苦しいし、逆に遠すぎると、孤独を感じてしまうからです。その絶妙な距離感の中で、自然に助け合い、気を配り合える場所、それが私の思うよい地域の姿だと考えています。地域というのは、ただ生活するための場所ではなく、人と人が安心していられる環境そのものだと思います。挨拶が飛び交い困った時は誰かが支えてくれる、そんな小さな優しさの積み重ねが、地域を良い場所へと育てていくのだと感じています。私もまだ誰にの役にも立っていませんが、この地域が好きだと思える理由の一つのような誰かを助けることができるような人間になりたいです。

地域とつながる神社、お寺

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

よい地域とは何かを考えたとき、私は「人々が協力し合い、安心して暮らし続けられる地域」であると考えました。では、そのような地域をつくり、長年守っていくために、昔の人々はどのような工夫をしてきたのでしょうか。調べる中で、神社やお寺が大きな役割を果たしていると感じました。そこで実際に中山寺と素戔鳴神社へフィールドワークに行き、地域との関わりを見てきました。



神社やお寺にはそれぞれ神様や仏様が祀られています。中山寺には十一面観音、素戔鳴神社には水を司る素戔鳴尊が祀られています。では、なぜそのような神様を祀り、神社やお寺を建てたのか。それは信仰だけではなく、地域の安全や生活の安定を願い、人々の不安を少しでも和らげるためでもあります。

中山寺は昔から安産祈願のお寺として親しまれ、出産に不安を抱える家族の心を支えてきました。また、お寺は自然災害から地域を守るという役割ももっています。中山寺は山の斜面や川の流れを考えて建てられており、自然を利用した配置によって水害を避け、地域の暮らしを守る工夫が見られます。

一方、高司の素戔鳴神社は、昔から武庫川の氾濫に悩んでいた人々が、水害から守ってもらうために素戔鳴尊を祀ったことが始まりとされています。全国的にも素戔鳴神社が建てられています。どの素戔鳴神社でも川が氾濫しやすいなどという水害の悩みから地域を守ってほしいという願いのため建てられています。このようなことから、それぞれの地域がどのように地域と向き合ってきたか神社からわかります。

また、神社やお寺では、古くから人々の感謝や願いを神様に伝えるためのお祭りが行われてきました。こうした行事は単に神に祈るだけでなく、地域の人々が互いに交流し、助け合いながら絆を深める場としても重要な役割を果たしています。現代においても、お祭りは地域コミュニティの大事な場面となっており、世代を超えたつながりや、地域の文化・伝統を守り継ぐ大切な機会となっています。

このように神社やお寺は、昔から地域と密接に関わり、人々の生活を支え続けてきました。地域が長く続くための大切な存在であることを、今回のフィールドワークを通して改めて感じました。

私にとってのよい地域

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私はよい地域とは何かという問いに一番に地域の人同士のつながりやコミュニケーションをとることがよい地域につながってくるのではないかという風に思いました。そこで私は、神社やお寺に注目して考えてみました。実際、神社やお寺では昔から地域コミュニティの中心としての役割を果たしてきました。なので今回、私はフィールドワークで、高司市にある素戔鳴神社と中山寺に実際に訪れました。素戔鳴神社では、昔から疫病除けや地域の安全を祈る場として地域と深く結びついてきました。武庫川の氾濫では人々の暮らしに大きな被害をがあり、不安になった地域の人々が素戔鳴神社で水害が起こらないよう素戔鳴命を祀り祈りをささげていたそうです。現在は、元旦祭や夏祭りなどの年中行事が行われており、行事の準備を通して協力することで、普段は話したことのない人とも会話が広がり地域に対する安心感などが生まれてきたことで地域の人とのつながりが今でも続いています。このように、地域の人々が集まることで自然と交流が生まれてきました。一方、中山寺は日本で最初の安産祈願の寺として知られており多くの家族が祈りを捧げてきました。古くから人々の安産・子育ての不安を支える場所であり『家族が無事に生まれますように』などの願いが集まる中山寺では、地域にとって心のよりどころであったことが分かりました。また、こうした巡礼や祭礼を通して地域の人々が集まり、あまり関わりのなかった人とも顔を合わせ話すきっかけを作ってきました。このように、神社や寺院は、人と人とのつながりを支える大切な場所として存在しているということが分かりました。

このことから、素盞雄神社や中山寺のような歴史的な場所は地域の人々の繋がりを深める役割を果たしていると言えらると思います。祭りや行事を通して、子供から大人まで世代を超えて関わることで、災害時の助け合いや、子供たちを地域全体で見守る意識にもつながり地域の生活をより安全にしたり、地域の一体感などが生まれてくると思いました。こうした場所は遠くから訪れる人にとっても交流の場とな



り、地域全体の活気を高めるきっかけになっていると思いました。私は、この素盞雄神社や中山寺の存在は、地域の人や歴史、文化を守るだけでなく、人々が関わり合い、助け合う仕組みを作る重要な要素であるということが分かりました。歴史的な背景や祭りなどの行事があることで、地域の人々の間で自然とコミュニケーションが生まれてきました。このように人と人とのつながりがある地域こそ「よい地域」だと考えます。

私が考えるよい地域とは

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私が今回の活動を通して地域について体で感じました。インドアな自分は外に出る機会も少なく地域ということについて調べる機会もありませんでした。ですが今回を機に地域とは何かよい地域とはという課題のもと調べる機会を得ることができそのことについて学びました。まず最初に感じたことは自分が非常に狭い世界で生きていた分外に出ることで知らない道、知らない建物など新鮮に感じることができました。こういった体験は調べ始めた初期のころでしか体感できない物なので貴重にしたいと思います。さて今回私がこの「よい地域とは何か」という課題について自分なりの考えがいくつかあります。まず一つ目にそこに暮らす人々が暮らしやすく何かあっても対応ができることです。例えば自分の家族が不随や病気で動けなくなってしまったとき自分の子供が不登校になってしまったときなどそういった場合に相談しやすい環境や安心して預けられるような場所が必要です。この場合は病院や児童館などだと思いますが。そのほかの場合にも柔軟に対応できるように整えておけるのがよい地域だと思いました。二つ目の理由は文化を残せる地域です近年新しいことに手を出すために昔からあったものをなくして新しく別のものにするといったことが多いように感じます。新しいことをするのは賛成ですが、その代償として昔ながらのものを消すとなると、将来の子供の感受性に悪い影響を及ぼすかもしれない、それは「昔の建物には価値がない、新しく便利なものこそ価値がある」といった価値観を持ちかねません。もちろんこの考え方を否定はしませんが色が褪せていくような、人間味がかけていくような悲しい気持ちが起きます。このようなことを私は望みません。だからこそ歴史ある建物は重要で後世に残すべきものでそれらができている地域がよい地域だと思いました。三つ目は、そこにかかわる人たちがお互いを尊重し、学びあえる環境が必要だと思いました。どれだけ建物がきれいでもそこに暮らす人々のつながりが弱ければ安心感や温かさは生まれません。住民同士のあいさつや助け合いが自然に行われる地域には確かな心地よさがあります。これらの理由からよい地域とは人と人との関係性、今を変えることへのリスク、安心感と信頼などが合わさって価値が形作られていものだと学びました。だからこそ自分も地域の一員として周りに関心を持ち小さなかかわりを積み重ねていくことが自分にできるよい地域づくりだと思いました。

中山寺と地域の関係

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

僕は、神社やお寺はどのようにして地域とかかわっているのか気になりフィールドワークを通して一年間でどの様な活動をして地域とかかわっているのかを調べました。

実際に中山寺に行って僧侶の方にインタビューをし、いくつか質問しました。最初の質問では普段僕たちのあまり触れることのない内容について質問をしました、中山寺の方たちはどのような生活を送っているのかを聞いてみましたところ意外な返答で9~17時まで365日活動していて、活動の内容はお経を読む、中山寺では安産祈禱という妊婦さんの腹巻に拝むというものです、ほかには亡くなってしまった方に拝んだり、境内の清掃をしていると伺いました。次の質問では、僕たちのペアの中で気になった点である僧侶などの住職の跡継ぎはどのような制度の上で成り立っているのかを聞きました。これについての返答では、寺にもよるらしく基本は家族の中で息子が継ぐケースが多いらしく、ほかの場合ではもともとの僧侶の方がやめることになった場合ある程度の年数を住職として勤めてきた方たちの中から辞められる方が決めたり自ら希望して僧侶になる方もいるそうです。ここからは地域とのかかわり方に関することについて質問をしていきました。まずお寺の方たちはどのような心意気でお寺に仕えて地域とかかわっているか聞きました。聞いてみたところ僧侶の方は、一年の中で年末年始や、夏に行われる星下り祭り、徳川家光が建てたという説のある中山寺正面の門などを時代の流れによって少しずつ変化してしまったとしてもそれを後世に残していくためにも文化を守っていきたいとおっしゃられていました。最後の質問では、お寺と地域との関わりはどのようなところにありますか？と聞いてみました。これに関しては、先ほどの文化を守り続けていくということと、近隣地域での赤羽募金箱の設置をしています。梅の咲く季節になると梅の木を見るために来る方も多いそうで癒しの提供という点で地域とかかわっていると話されていました。

これらのことから中山寺は様々な面で地域と関わっていて僕たちの生活と近いところではなくとも、赤羽根募金や寺への参拝者との関わりで地域のためになっており、よい地域とは地域のために人が動き、一人一人が文化を守っていくことを大切だと思う、そんな人たちが作るものがよい地域だと思いました。

食と文化とよい地域

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

よい地域とは何かについて考えたときに私は、治安がいいことや地域内で交流の機会があることが重要だと考えました。そこで地域内での交流について実際にどんなものがあるのか疑問に思い調べることにしました。調べていく中で、地域ごとに学校給食などの食文化から、地域のつながりについて知ることができると考え、伊丹市、西宮市、宝塚市の食文化と地域とのかかわり、地域ごとの違いについて実際に地域に行き行って調べることにしました。

伊丹市は、酒造りが有名で江戸時代から栄えており、市内には、旧岡田家住宅・酒造など、酒造りについて知ることができる場所があり、誰でも訪れることができました。また、学校給食で伊丹市の酒粕を使用した、料理が出るなど子供のころから、伊丹の食文化と歴史の関係について触れる機会が多くあることが分かりました。

宝塚市は、たからづか牛乳が有名で地域の主婦団体の呼びかけではじまり、宝塚市内で育てられた、牛からとった牛乳のみを使用しており、直売所やカフェがあり、地域の人々に愛されています。また、宝塚歌劇団とも関わりがあり、ポスターなどが貼られていました。近年では、障害者の従業員としての受け入れも行っていて、地域に寄り添っていると感じました。

西宮市は、室町時代から酒造りで栄えており、宮水と呼ばれる清水で作られた酒はいろいろな地域で飲まれていました。地域には酒蔵通りがあり、地域内に多くの資料館などがありました。給食でも、西宮の酒粕などを使用した料理や、校外学習で資料館に行く、さらに酒祭が毎年行われているなど地域とのかかわりが深いことが分かりました。

これらを実際に地域に行き行って調べてみて、私は地域と食文化のつながりは切っても切り離せないもので、地域ごとの特徴のあった食が根付いており、さらに食を通して現代の地域間での人のつながりだけでなく、食に関わってきた昔の人々ともつながることができると感じました。

このことから、よい地域とは単に治安がいいことや交通が整備されているなどの便利さや住みやすさだけでなく食などを通しての地域内や地域間での人とのつながりが深くかかわってくると感じました。また、人との関わりは当事者たちだけでなく地域の雰囲気にあたたく明るいものにすると感じました。

よい地域と食文化

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は「よい地域とはなにか」ということについて、それぞれの地域の歴史や文化や特徴、地域内での交流を大事にしていることが深く関係していると考えました。

普段身近にある「地域」について考える機会は少なく、「よい地域」が何なのかと聞かれると「仲がいいこと」「治安がいいこと」「交通整備されていること」「ルールを守っていること」と考える人は多く、私自身も、挨拶などのコミュニケーションが豊富なことだと考えていました。しかし、それはすべて外面の特徴だということについて考えました。それから、実際に宝塚、伊丹、西宮に行きそれぞれの地域の内面を探求していく中で特に食について調べ、その結果、歴史や文化があることがよい地域と関係していると考えました。

まず宝塚は、北西の西谷にある牧場で飼育した地産の牛乳を使って、プリンやヨーグルトを販売している、たからづか牛乳を調べました。ここは、子供に安心して飲ませることができる、安全な牛乳を製造してほしいという声を聞き、牛の飼育からこだわるなどお客さんに寄り添い、工夫をしています。さらに、障害者の方に働く場を提供していて地域の人からも親しまれています。この牛乳は、宝塚市の学校給食で提供しているところもあり、地域との繋がりを感しました。

次に伊丹は、古くから日本酒の産地であり、酒造りの道具を見学できる酒蔵を調べました。建物は誰でも気軽に入れるように解放されていて、中に入ると職員の方が伊丹の歴史のお話をしてくださいました。伊丹の土地のことからお酒のことまで様々聞いている中で、授業で習って知っている言葉もあり、伊丹の歴史は他よりも多いと感じ、大切にされていると考えました。

最後に西宮も、古くから日本酒の産地であり、今も多くの酒蔵が残って立ち並ぶ酒蔵通りを調べました。その近くに酒蔵ミュージアムがあり、私は以前小学生の頃に校外学習として見学しに行った経験から、地域と食の歴史との繋がりを感しました。

今回探求した食文化を通してそれぞれの地域の食のことや、地域の魅力、地域の歴史・文化、地域と食との繋がり、地域内での思いやりを感じることができました。それと同時にそれぞれの地域のよさも感じる事ができました。

このことから、私は地域の歴史や文化や特徴、地域内での交流を大事にしていることがよい地域と深く関係していると考えます。

よい地域と人と文化と歴史

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私にとっての「よい地域」とは一人ひとりが歴史や文化を守っていく姿勢がある地域であると考えました。

私は高校の総合探求で行われている地域探求の授業を選択し、地域について探求してきました。初めに「よい地域とは」について考えた際、「横のつながり」や「近所での助け合い」という点が上がりました。私も、「よい地域」には「人と人とのつながり」が大切だと考えていました。

その後、グループごとに地域について探求する機会がありました。地域について探求する中で、私たちのグループでは、給食で地域の食材が使われていたことから、「地域の食文化」について探求してきました。一つの地域だけでなく、周辺の地域を見て、比較をしたかったため4つの市の様々な施設やその周辺に行きました。施設に行くと、歴史的な資料や情報があるだけでなく、施設の方やその食材を販売している方の話を聞く機会がありました。そこから私は、それぞれの食には歴史や文化があることが知れました。しかしそれだけでなく、施設の方の話を聞くことにより、施設の方を含む様々な人たちが歴史や文化を守り、次の世代につないできていたことについて改めて実感しました。

私はこの体験を通した後、今の自分が歴史や文化を知れる理由は、歴史や文化を様々な人が守り、つないできたからだと考えました。食文化にとどまらず、戦争や震災などの多種多様な歴史が、今を生きる私たちまで受け継がれていると思います。私は、それらから学べる事や学ばなければならないことは多くあり、その学びは私たちや未来を生きる人々の生活に知恵を与え、生活をより豊かにするものだと考えています。そのため、「よい地域」には人と人とのつながりだけでなく、地域全体で歴史や文化を守って、次の世代につないで行けることが必要だと考えました。

今の私たちは、過去の出来事を実際に体験したことも見たことも、もちろんありません。しかし、学校で学んだり、今回の私のように、地域の施設から知ることや学ぶことができます。そうすることにより、私たちの世代も歴史や文化をつなぐ一人になることができます。このことから、「よい地域」とは一人ひとりが歴史や文化を守っていく姿勢がある地域であると考えます。

よい地域とは何か

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

よい地域とは何なんだろうか？そう考えた時私は、豊かな自然があること。交通が便利であり、安心して暮らせること。ほかにもいくつかあげられる。しかし、地域の魅力をもっとも形作っているのは、「食文化」ではないかと私は思う。食は日々の暮らしに最も近く地域の風土や人々の営みが凝縮された文化であり、地域の良し悪しを静かに、また力強く語っている。

食は、人と人とのつながりを持つ。市場や直売所では、生産者と住民がさりげない会話を交わしながら食材を選ぶ。そのやり取りには、互いを信頼し支えあってきた地域の歴史が想像できる。地域ならではの食材の作り方を教わったりすることで引き継がれてきた。こうした温かい交流は地域の空気を柔らかくし人々がここで暮らしたいと思う理由になる。

よい地域には、食を通じて承諾される記憶がある。祭りの日に欠かせない郷土料理、お正月に家々で作られる伝統の味、季節の行事とともに食べる決まった料理。それらは単なる食べ物ではなく、地域の歴史や家族の物語を未来へと渡す大きな役割を担っている。子供のころに食べた味を大人になって思い返すと心が温まるのは、料理に地域の記憶が息づいているからだ。

一方で、職を絡めてよい地域とはという観点で話し合ったとき、新しい食文化を歓迎できる地域でもある。移住者が持ち込んだことなる料理や食材が地元の味と混ざり合い、新しい根異物が生まれることもある。伝統を守りつつ変化を受け入れる柔軟さは、地域を活気づける大きな力となる。食は文化の入り口でもあるため、多様性を大きく受け入れるきっかけにもなる。

結局のところ、よい地域とは「食を通じて人と土地が繋がる場所」である。おいしいものがあるから魅力的なのではなく、そのおいしさを育む風土があって、分かち合う人がいて受け継ぎたいという文化があるからこそ、地域は良い場所へとなる。食文化は地域の心そのものであり、人がその土地を大切に受け継いでいく理由になる。

私たちが経験し学んできた知識や価値観を次の世代に伝えることは、文化や思いやりを未来へつなぎ、彼らが豊かに生きる土台を作る大切な行為である。

『よい地域』

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私が考える「よい地域」は、まず「近所の人たちとの関わりが多く、地域行事が盛んな所」でした。関西学院大学の方と話したときも、高司地区について事前に調べたときも、そのイメージはあまり変わりませんでした。私はこれまで、友達についていく形でボランティアとして高司地区の地域行事に参加したことがありますが、私の暮らしている地域よりも地域行事が多く活気があると感じていました。なので、行事が多ければ近所の人との関わりも増え、よい地域になると考えていました。

ですが、実際に高司地区に足を運び、まちづくり協議会の方にお話を伺ったところ、若い人たちは「仕事が忙しい」「お祭りをしたいと思う人が減っている」といった理由から、「地域」というコミュニティから離れつつありお祭りなどの行事は年々減少しているそうです。それでも、すこしでもたくさんの人に参加してもらうために子ども向けのイベントを開催するなど工夫しているそうです。

そして、また別の姿も見えてきました。それは行事関係なく「町のために活動する人たちの姿」でした。下校中の小学生に危険がないように立って見守っている方、公園の掃除をして町のきれいを守っている方など、行事以外でも町のために活動する人たちの姿がとてもかっこいいなと思いました。

そこで私は、「よい地域」とは行事の数だけで決まるのではなく、地域のために働く人の思いや行動によって形作られているのだと思いました。たとえ行事が減っていたとしても、地域を大切にしようとする気持ちを忘れずにいれば、その地域は「よい地域」であり続けると思います。また、まちづくり協議会の方の話を聞いていると自分たちの地域をよくしたいという思いがとても伝わってきました。

そして、私自身も地域の一員として何ができるのかを考えるきっかけになりました。大きなことはできなくても、挨拶をする、ゴミを拾う、地域のイベントに積極的に参加するなど、小さな行動でも地域をよくすることにつながるのだと気づきました。高司地区で出会った人たちのように、私も「誰かのために行動できる人」になりたいと思うようになりました。これからも地域とのつながりを大切に、自分の住む地域もよりよくなるためにできることを探していきたいです。

地域コミュニティは必要か

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は地域探求の授業を通して「よい地域」について考えていく中で、地域になにかあったときに助け合える関係があることが大切であるとたどりつきました。そのような関係を地域コミュニティと呼ぶと知りました。地域コミュニティとは特定の地域に住む人々が相互に交流し、協力し合う集団や関係性のことです。私はそこで、地域のために活動をしている団体の存在が欠かせないと思い、この授業を通して高司のまちづくり協議会を中心にさらに深めることにしました。調べ学習、まちづくり協議会へのインタビューなどを行い深めていくと、私の中で3つの疑問が浮かびました。

まずひとつめは、なぜ地域コミュニティは減少しているのかということです。例えば、高司地区にはみゆき会館という場所があります。この場所では以前、まちづくり協議会が地域交流のイベントを企画されていました。ただ、実際高司地区やその周辺に住んでいる人の中で、この場所の存在を知っている人は何割程度なのかとも疑問に思いました。私は自分の地域への興味が減っていることが、地域コミュニティが減少しているひとつの原因ではないかと思います。

ふたつめは、現代の地域への関心についてです。ひとつめに挙げたみゆき会館の近くの公園に行くと、公園内を掃除してくれている方を見かけました。このような仕事は地域の人がボランティアでしてくださっていることが多いと思います。このような仕事は、自分の地域に関心を持っているひとがいれば続いていくけれど、現在のままではこのような仕事はボランティアでは成り立たなくなってしまうのではないかと感じました。同時に、自分の地域に関心を持ってもらうにはどんなことができるのかという新しい問いも浮かびました。

みっつめは、現代に地域のひと同士の交流は必要なのかということです。現代ではインターネットでのつながりが当たり前になり、わざわざ地域コミュニティが必要だと考えている人は減少したように感じます。ですが、私たちの生活に身近であり、もし地域になにかあったときに必要なのは地域コミュニティであると私は考えています。この授業を通して、新しい見方に出会うことや改めて考えたことがたくさんありました。これから私は地域コミュニティを維持するために何ができるのか、より深めたいと思いました。

つながる地域コミュニティ

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私が思うよい地域とは、「地域コミュニティでのつながり」というのが関係しており、重要だと考えました。私は「地域コミュニティ」ということについて考えることは少なく、機会がなかったのですが、地域探求の授業をきっかけに「地域コミュニティ」の様々な活動、役割などを知ることが出来ました。なぜ私がこれを重要だと考えたのか、理由は大きく分けて2つあります。1つは、自治会の活動や行われていることです。私たちが調べさせていただいた高司地区では、近くのグラウンドや会館を使った体を動かす活動のほか、クリーンハイキング、公園内での花植えをはじめとする緑化が行われています。これらのことから、域内の人たちでのつながりがあって、深く関わりあっていると考える事ができます。もう1つは、「地域コミュニティ」の役割についてです。地域コミュニティの役割として挙げられるのが、安全な環境を整える、住民同士での助け合いや回覧板などを使った情報の共有が挙げられます。災害時や緊急時には、避難所の運営や地域住民同士での助け合いの支えあう仕組みが作られています。高司地区では、このような住民同士でのつながりを作るために、今では数少なくなってしまう祭りやイベントを使った交流を増やす努力をされているそうです。この2つのことから「地域コミュニティ」は、地域内の住人で助け合い支えあう仕組みやイベント、行事などの多様なアクティビティでコミュニケーションをとり、多種多様なつながりをつくっているまた、できているのだと考えました。これらのことをまとめ、私の思うよい地域とは、地域住人同士での関わりが多く孤独になりにくい環境で災害時に一人にならず、助け合えることが当たり前である状態が地域内にあるのがよい地域だと思いました。私は、今回の活動を通して「地域コミュニティ」の大切さや地域住人同士でのつながりの大切さを学びました。これらの学んだことをこれからの生活、周りの住人との関わり方や地域住民とのつながりを意識し、より一層よい地域に近づけるようまずは、あいさつから始め次第には世間話の1つや2つでもできる関係、つながりをつくれるよう努力していきたいです。

地域のつながり

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は「よい地域」とは、住民同士のつながりがあって、安心して暮らせる場所だと考えます。高司では、少しずつ住民同士のつながりが弱くなってきているように感じます。以前は行われていた祭りや行事も、今はあまり行われなくなり、地域の文化を体験できる機会が減ってきているように思います。

お話によると、コロナ前までは元気な高齢者の方々が中心となり、祭りを企画・運営したりやぐらをくんだりしていたそうです。また、PTAの方も協力して活動を支えていた時期があったそうです。しかし、祭りや行事には多くの準備や労力が必要で、仕事や家庭で忙しい若い世代には負担が大きく、だんだん続けられられなくなったとのことでした。そのため、やぐらを組む技術なども十分に次の世代に引き継がれず、祭り自体も少なくなってしまうそうです。

さらに、若い世代から「やってみたい」という声はあまり聞かれないそうです。子どもたちはほかの地域の行事に参加することが増え、自分の地域で文化を体験する機会は少なくなっているようです。また、日常生活の中で自治会でのつながりをあまり必要と感じない人もいるようで、大きなコミュニティは少しずつ弱まっているように思いました。

一方で、散歩のついでに道端のゴミを少し拾う、公園の花を植える、ご近所の人と挨拶やおしゃべりをするなど、日常の中での小さな関わりを大切にしている方もいます。高司まち協でも、防犯パトロールや見守り活動、公園の清掃など地域を支える取り組みが行われています。こうした身近な活動は、祭りのような大きな行事に頼らなくても、地域のつながりや安心感を育む一助になっていると感じました。また、こうした取り組みが住民どうしの関わりを広げる場になっていると感じました。

日常の小さな関わりや異なる世代の交流を通して、地域で顔なじみの人が増え、困ったときに助け合える関係も自然に生まれていくのではないかと思います。

私は、地域のつながりは一部の人だけでつくられるのではなく、住民一人ひとりが少しずつ関わることで成り立つと感じました。よい地域とは、住む人が協力しながら未来の世代に文化やつながりをつないでいける場所だと思います。みんなで少しずつ関わりを大切にして、地域を盛り上げていけたらいいなと思います。

繋がりにから分かる地域の良さ

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は最初、「よい地域」とはなにか考えたとき、「地域交流の機会が多く目に見える地域」と答えました。なぜなら、地域同士の仲がよい地域こそよい地域なのではないかと感じていたからです。しかし、今回の地域探求を通して、目に見えるものすべてが地域の良さを感じさせているのではないのではないかと考えるようになりました。

私は地域探求の中で、食文化に注目し、高司にある「今里食品工場」に着目するようになりました。この工場は、麺食品が主に盛んで、全国にある3店舗のうち1店舗が高司にあります。地域周辺のローソンなどを中心に商品が販売されており、地域周辺に住む人々からも愛される暖かい食品工場だと事前学習を通してわかりました。食文化というのは、個人的に近年に発達したものが多いいろって思っていたのですが、この今里食品工場は1947年創立であり、古くから守られている伝統的な食文化なのだと思いました。

そして、実際に今里食品工場まで行ってみると、まずは住宅街の中に大きな工場があるという点に驚きました。工場というのは地域住宅からは離れたところにあるイメージだったため、地域との距離が近いものでないと成り立たない物なのではないかと考えます。そして、周りを散策してみると、飲食店が多いように感じました。また、私は今里食品の商品を上手く見つけることができなかつたのですが、立地から地域としての食文化のまとまりを感じました。特に、他地域の食品工場と比較してみると立地に関して異なる条件があるように感じました。

この体験を踏まえて、私は「何故地域の人はこの立地関係でも不満が出ないのだろう」と疑問を持つようになりました。3段落でも述べた通り、工場というのは住宅街とは離れたところにあるイメージがあります。私が考える理由は、「無数の繋がりと地域から愛されている工場だから」です。メインとなる販売地域のコンビニであったり、周辺に飲食店が幾つか見受けられたりと、裏での繋がりが多く、それが地域からの信用につながっているのではないかと考えました。

改めて、私の考える「よい地域」というのは「一つ一つの細かい繋がりがあり、一体感がある地域」です。その繋がりが見えるものでも見えないものでも、それが地域をつなぎいい影響を与えていると考えます。

高司の魅力

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

地域探究をするにあたって私は高司の食文化について関心を持ちました。関心を持ったきっかけは、日本国内でも地域によって食文化は異なっていくもので、高司の探究をしていく中で食文化がどのように発展していったのかとても気になったからです。

まず、高司には様々な飲食店や食品工場がありますが、フィールドワークを行う上でコンビニやスーパーなど私たちの身近な店舗に食品提供している「今里食品」に焦点を当てて探究を行いました。

今里食品は日本国内に工場が三か所あり、その一つが高司にあります。また、先ほど述べた通り近畿・四国といった西日本を中心にオリジナルの調理麺などを提供しているため、近畿地区では大手コンビニ調理麺のシェア率No.1になっています。これらを受けて、私たちを含め、地域の住民は気づかないうちに今里食品の商品に触れておりその商品を通して地域と深く結びついていることがわかりました。また、それぞれの工場の設備・能力や、物流の体制に合わせて生産しているため、地域に負担がかかることなく、地域の特性に合わせた生産ができるため地域に寄り添った工場だと感じました。また、このような大手の食品工場が地元にあることは、地域の雇用の拡大や経済の活性化につながるし、地元にもこういった食品工場があるからこそ工場見学などを通して子供たちが食に関われる良い機会が増えると感じました。

実際に今里食品にフィールドワークに行った際、想像よりも工場自体が大きく工場の外観はしっかりとした作りで設備が十分に整っている様子が見て取れました。特に印象に残ったことは工場周辺の静かさです。食品工場というと、機械が動くためどうしても音がうるさくなってしまうりトラックの出入りも多いので騒音が大きいと思っていましたが今里食品ではそうした騒音は全く聞こえず、営業中にもかかわらず、周辺は落ち着いた雰囲気、地域住民が安心して生活できるように周りの環境への配慮がしっかりと施されていると感じました。このような地域を第一に考えた行動の日々の積み重ねで地域と工場との信頼関係は深まっていき地域は活性化していくんだと感じました。

今回の探究を通して、今里食品は商品の品質だけでなく地域との関係性も大切にしながら活動していることがわかりました。また、今後も今里食品だけでなくほかの飲食店や工場に密着して高司の食文化について探究していきたいと思いました。

子ども達を見守る地域

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私は探求の中で高司の小中学校に着目しながら問いの答えを考えてきました。その結果、私が思う「よい地域」とは、学校と地域が支え合い、子供たちの成長への思いを日々の生活の中に形にできる場所だと思います。私は伊丹市に住んでいて、高司出身ではありません。だからこそ、客観的に地域を観察して、新しい発見をすることができました。

フィールドワークで訪れた際、下校中の小学生が地域の大人に見守られていました。通学路に立つ大人たちは子供たちと軽く言葉を交わしながら、当たり前のように安全を支えていました。それを見て私は、見守りとはその地域の文化なんだと感じました。地域の一人ひとりが子供たちの存在を大切に思っているからこそ生まれる雰囲気だと思います。特別な取り組みではなく、それが日常になっていると知って心が温かくなりました。

また、小学校と中学校が住宅街の中にあり、子どもたちの生活と学校が密接につながっていることも特徴だと感じました。学校が住宅街の中にあることは子供同士や親同士の交流が増え、安全面でもメリットが大きいです。近くには大きな公園があり、放課後に子どもが安心して遊べる環境も整っていました。こうした地域のつくりそのものが、子どもを見守る土台になっているように感じました。

一方で、小中学校のホームページで年間行事を確認してみると、小学校と中学校が合同で行う活動はそれほど多くないようでした。実際に高司出身の友達に話を聞いてみても、学校生活の中で小学生と中学生が関わる機会はあまりなかったそうです。しかし、プライベートでは年齢関係なく知り合ったり、一緒に遊ぶことがあったという話が印象的でした。もし学年を越えて交流できる場があれば、地域として新しいつながりが生まれて面白いのではないかと思います。

今回の探究を通して、私は「よい地域」とは特別な取り組みがある場所ではなく、子どもを気にかける姿勢が日常に溶け込んでいる場所なのだと気づきました。高司地区で見た何気ない見守りや環境づくりは、地域の人々が長い時間をかけて培ってきたものだと思います。地元ではない私も、その温かさを客観的にしっかりと感じるすることができました。今回の探求は、地域の力が子どもの安心や成長を支えていることを実感できる良い機会になりました。この地域から学んだ“誰かを気にかける当たり前さ”を、これから自分が暮らす場所でも大切にしていきたいと思います。

「未来を担う子供たち」

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私が考える「よい地域」とは、子どもを大切にして、子どもが安心して育っていけるところだと思う。なぜかという、地域の未来をつくるのは子どもたちで、その子どもたちが地域のことを好きになって、将来もここに住みたいと思ってくれるかが大事だと思うからだ。どれだけ歴史があつたり景色がきれいだったりしても、それを次の世代に伝える人がいなくなると、地域の元気も魅力もなくなってしまう。

高司の文化について調べていた班の発表では、文化や行事を受け継ぐ人が少なくなっていることが問題だと言っていた。高齢化が進み、今まで行事を支えてきた人が引退していく一方で、それを引き継ぐ若い人たちは地域にあまり残っていないらしい。子どもが減れば学校も小さくなり、地域の活動も減って、つながりが弱くなるという悪い流れが起きている。こういう話を聞くと、子どもを大事にして育てやすい環境を作ることは、本当に必要だと感じた。子どもを大切にする地域とはどんなところなのか。私は、国や県の制度だけじゃなくて、地域の大人たちが子どもを当たり前のように見守ってくれる場所だと思う。実際に高司小学校や高司中学校のそばを見に行ったとき、地域の大人が下校する子どもたちを見守っていて、あたたかい雰囲気があつた。また、高司児童館では不登校の子どもの学習のサポートをしたり、遊び場や学びの場をつくったりしていて、地域の人たちが子どもとちゃんと関わっていることも知った。こういう環境があると、子育てする家庭も安心できて、地域に対する気持ちも強くなると思う。高司の子どもたちの様子を見て、児童館など子どもと関わる場所をもっと増やしたり充実させたりすれば、若い人が地域に残るきっかけになるのではないかと思った。そうすれば文化や伝統を受け継ぐ人も増えて、地域ももっと元気になると思う。

こうして考えると、よい地域とは子どもを中心にして、地域のみんなで子どもを支えていく場所だと言える。子どもが安心して育てる場所なら、地域の未来も自然とよくなっていく。文化や伝統が受け継がれ、人と人が助け合って暮らしていく。そんな地域こそが「よい地域」だと私は考える。

人のつながり

兵庫県立伊丹西高等学校 〇〇 〇〇

私は若い世代だけではなく子供、高齢者も不自由なくすごせる地域がよい地域だと考える。地域の人たち同士のつながりがあれば助け合うことができるとか考える。しかし若い世代はよくも悪くも自分たちの家庭のことは自分たちですることができるし、特に小さい子どもがいる家庭だと自分たちのことになってしまうと考える。そのため地域のことに関わるのが難しいと知り、地域のお祭りや行事も減っているとのだとわかる。またお祭りが減っている原因として、もともと運営をしていた世代の人たちが運営できなくなってしまったことや、コロナウイルスもあるのではないのかと考える。しかしお祭りなどがなくなってしまうと、子どもたちが楽しめる機会や場所がなくなってしまう。私も小さい頃は近くのお祭りに参加し友達と遊んだ記憶があるので、やはりなくなるべきではないと思う。そのためには余裕のある時だけでも地域のことに目を向けることで状況は変わるきっかけにはなるのではないかと考える。高司児童館で話を聞いたときに、親同士話すことができるスペースがあったり、不登校の生徒が勉強できるような子育て支援があると知った。このような支援がお祭りなどの行事とは違うが地域の親や子どもをつなぐものの一つであると考え。実際に放課後に高司児童館に来て宿題をしたり遊んだりしている様子を見ました。このように子どもたちが放課後に過ごすことができる場所があることで友達との交流を深めることができると思う。また先ほども述べた通り、親同士の交流も可能なためそこで地域の輪を広げることができるのではないかと考える。そうすることで地域のことについて話す機会も得られる。このように本当に小さくてもいいから地域の人同士のつながりをつくっていくことで今まで通りとまではいかなくてもまた行事などが復活していく可能性があると考え。地域の人々が日々の挨拶や行事を通してつながることは、小さな安心と信頼を積み重ねることにつながる。困ったときに声をかけ合い、喜びを分かち合うことで、地域は単なる生活の場から支え合う共同体へと変わる。人のつながりが根を張ると、地域全体に温かさと活力が生まれ、よりよい未来をともにつくる力となると考える。

高司を調べて

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

わたしたちのグループは高司の行事について調べました。

児童館等でインタビューを行った結果、高司では年々地域としての行事が減っていることがわかりました。ですが高司では放課後に児童館を開放していたり、学習室を開いていたりと地域の人々の目が子どもにすごくおけられているなと感じました。地域としての夏祭りや秋祭りはほとんど見られなくなっても、どうにか地域を盛り上げようと試行錯誤していらっしゃる地域の方々を見てすごく感動しました。また、児童館は元は幼稚園だった施設を改修して使っており無駄に取り壊したりしないところもすごくいいなと感じました。

これらの経験から私は高司のような『よい地域』とは、誰かが何かを成し遂げられるような環境やそれを支える人たちがいてはじめて成り立つのだなと感じました。ご高齢の世代が小さい子ども世代に向けて何かをしようという姿勢にすごく感動しました。児童館の方々は一年を通していろんなことを企画していらっしゃいました。児童館の中だけでなく、小学校などの他の施設を活用したイベントや地域の他団体を招いてのイベントなど子どもから地域を盛り上げようという意図をすごく感じました。小さい地域ではありますが、各地域がこのようなことを企画し続けていけば地域は活発であり続けるのではないかと考えました。

子どもの数が多いからよい地域、少ないから悪い地域、イベントの数が多いからよい地域、少ないから悪い地域というわけではありません。地域をどうしたら盛り上げられるか、子どもたちに大人が何かできることは？を追求する人がいる限りその地域はよい地域だと私は考えます。それを企画、運営する人がいることがとても良いことだと感じます。

では、自分の地域はどうか？と考えてみました。

よく考えてみると私は自分の地域のことをあまり知らないと感じました。今回高司の内情が知れたのも、学校の地域探求という授業の中でインタビューができたからです。このことから自分の地域でどのようなことが企画されているのかなどを自分で知っていくことがすごく大切だなと感じました。企画する人、それを支える人、知る人が地域には必要だなと強く感じました。

つながりが町を作る

兵庫県立伊丹西高等学校 ○○ ○○

私たちは地域探求の授業で「良い街とは何か」というテーマを考えるために、高司でフィールドワークやインタビューを行いました。その中で特に印象に残ったのは、高司児童館で伺った「祭りの変化」についてのお話です。インタビューを通して、高司の祭りはかつて家族全員で参加するほど地域全体が盛り上がり、世代を超えた交流の中心となっていたことを知りました。しかし現在では、当時に比べて参加者が大幅に減り、地域住民が集まる機会も少なくなっているそうです。

その背景には、共働き世帯の増加によって子どもや家庭が地域行事に関われる時間が減ったこと、祭りを指導する人が高齢化し後継者がいないことなどが挙げられていました。地域の交流が減ることで、子どもたちが地域の人と関わるきっかけも減り、昔のような「人と人のつながり」を感じられる場が失われつつあることを知り、私は寂しさと危機感を覚えました。

一方で、インタビューの中で「昔のようにもっと街を活気づけたい」「もう一度人がつながる高司に戻ってほしい」という声があったことも、強く心に残りました。現在の高司が抱える課題は単に“参加人数が減った”というだけでなく、“地域のつながりが弱くなっている”という大きな問題につながっているのだと思います。しかしそれは同時に、街をより良くするための可能性がまだ残っているということでもあります。

そこで私は、街を変えるカギとなるのは私たち若者世代なのではないかと考えました。現代の子どもたちは地域の大人と接する機会が少なくなっていますが、もしその間に私たち中高生や若者世代が入り、イベントや遊びを通して子どもたちと関わることであれば、地域の交流を生み出す新しい架け橋になれるのではないかと思います。世代が離れすぎた関係だと距離を感じてしまっても、少し年上の若者が先頭に立つことで、子どもたちも参加しやすくなり、大人たちも街づくりに再び関わるきっかけになるはずです。

高司の街は、かつて“人と人がつながる場所”として発展してきました。時代が変わって生活スタイルが変化した今、そのつながりを同じ形で取り戻すことは難しいかもしれません。しかし、別の形で新しいつながりを生み出すことはできます。そしてそれを実現できるのは、地域に住む「私たち」だと感じます。私たち若者世代が一步踏み出し、地域の行事や子どもたちへの関わりを積極的に生み出していくことで、高司は再び“人が人とつながる街”になれると信じています。



インタビューを通して私は、街づくりは一部の人だけが担うものではなく、一人ひとりの意識と参加によって作られていくのだと実感しました。もし私が将来この地域に関わる機会があるのなら、ただ住むだけでなく、そこに暮らす人たちと関わり、地域のつながりを守る側になりたいです。良い街とは与えられるものではなく、自分たちの手で育てていくものだと思います。